

Title	マルグレーテの指示書について
Author(s)	牧野, 正憲
Citation	IDUN -北欧研究-. 2007, 17, p. 227-240
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/96443">https://doi.org/10.18910/96443</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# マルグレーテの指示書について

牧野 正憲

## 1. はじめに

マルグレーテとは、女性であるがゆえに即位できなかったが、デンマークの事実上の女王として1375年から1412年まで実権を掌握し、また1397年には、デンマーク、スウェーデン及びノルウェーの北欧3王国による政治的統合体、いわゆるカルマル連合を成立させた人物である<sup>1</sup>。彼女の統治や人物像に関しては、当然のことながら、多くの公的な史料を通して知ることは可能であるが、本稿で考察するエーリク王への指示書は、その内容からして極めて私的な、スウェーデン人の中世史家リントンの表現を借りれば、「top secret」<sup>2</sup>なものである。したがって、これを考察することによって、彼女の隠された政治手腕を明らかにする手がかりを得ることができると考えられる。このような認識に立って、この指示書を検討し、マルグレーテとエーリク王及び2人の統治時代に対する理解を一層深めたい。

## 2. 指示書

指示書の原本は、王国古文書館に保存されているが、湿気などのために損傷が激しく、今日幾つかの条項は、解読不可能である。しかしながら、幸いにも、デンマーク人歴史家ヤコブ・ランゲベク（1710-75）の写本によって、今日その内容が伝えられている。原本は羊皮紙ではなく、紙に書かれており、四つ折り版の小冊子である。日付の部分が欠落しているため、これが書かれた正確な日時は不明であるが、その内容から判断して、1405年1月21日から2月15日までの間であることは確実であり<sup>3</sup>、またマルグレーテ自身の手によるものであることも疑問の余地がない<sup>4</sup>。

エーリク王は、1405年初頭からノルウェーへの視察旅行に出発するが、その途上ノルウェー西海岸の都市ベルゲンで、翌年結婚することになるイギリス王ヘンリー4世の娘フィリップに会うことも、その目的の1つでもあった。この機会にマルグレーテは、彼女の養子であり、同時に3王国の連合国王であった当時23歳のエーリクに、様々な忠告や助言を与えたのであった。したがって、その内容の大部分はノルウェーに関するものである<sup>5</sup>。

指示書は54条からなっており、後の章で詳細に触れるが、マルグレーテの指示は、エーリクが様々な状況下で国王として取るべき行動や態度について、極めて

高度な政治的手法から、彼個人への仔細な教育的助言にまで及んでいる。統治上極めて重要な指示の次に、些細な内容のものが並んでいるなど、指示が系統だつて配置されているわけではなく、直情的または私的表現が混じっていることから、マルグレーテがエーリク以外にこれを読ませることを意図したものでなかったことは明らかである<sup>6</sup>。このような極めて私的な文書が今日まで保存されていること自体奇跡である<sup>7</sup>、とデンマーク人歴史家のエチングは語っている。

現存するマルグレーテの直筆とされる私的文書は2通に過ぎないと考えられている<sup>8</sup>。1通目は、1370年もしくはその前年に、夫のノルウェー王ホーコン6世に宛てたものである。当時17歳であったマルグレーテは、オスロ湾を望むアーケシュヒュース城から夫に対して、宮廷の経済的窮状を訴え、オスロ在住のドイツ人商人から支援が得られるよう取り計らいを要請している。この文面から、当時ノルウェーが直面していた困難な状況を知ることができると共に、王妃として宮廷の管理を取り仕切るまでに成長したマルグレーテが窺えるのである<sup>9</sup>。

他方、もう1通のこの指示書は、50歳を越え、多くの政治的難局を乗り切ってきたマルグレーテが、若き後継者に対して豊富な経験に基づき、数々の助言と忠告を授けたものであった。したがって、この書はマルグレーテの心の内を率直に表したもので、すなわち、まさしく彼女の政治的手法の内幕を明かすものとして、非常に大きな意味を持つ史料であると同時に、マルグレーテの没後、王位を継承した連合国王エーリクの行動を考える上でも極めて貴重な情報源となるものである。

### 3. マルグレーテとポンメルンのエーリク（7世）

この指示書を考察する前に、マルグレーテとエーリクの生涯について簡単に触れておきたい<sup>10</sup>。

マルグレーテは1353年にデンマーク王ヴァルデマー4世と王妃ヘルヴィとの間の6人目で末っ子として生まれた。シェラン年代記の1353年の条には、「王妃が女の子を出産し、尊敬すべき師であるロスキレ司教ヘンリクがこの子に洗礼を授け、マルグレーテと名づけた」<sup>11</sup>とある。これがマルグレーテの誕生に関する記録の全てである。また彼女の幼少期についてもほとんどわかってはいないが、彼女は6歳の1359年に、当時18歳であったノルウェー王のホーコン6世と婚約させられたが、コペンハーゲンで結婚式が挙行されたのは、1363年4月9日であった。スウェーデンやデンマークでの政治状況の所以であった。彼女は1370年に息子オールフを儲けることになる。

彼女が政治の表舞台に登場するのは、1375年以降である。この年の10月24日に、父王のヴァルデマー4世が他界したが、彼の1人息子のクリストファーは、

すでにその12年前に死去していたので、王位継承問題が浮上した。当時2人にデンマークの王位継承権があった。1人はマルグレーテの姉インゲボーが北ドイツの有力なメルンブルク家のハインリヒ1世のもとに嫁ぎ、2人の間に生まれたアルブレヒト、もう1人はマルグレーテの息子オールフであった。そこで彼女は息子をデンマーク王位に就けるべく行動を起こし、デンマークの有力貴族や高位聖職者を味方につけ、翌1376年5月にオールフを王位に就けることに成功した。また1380年夫のホーコンが他界したので、息子のオールフがノルウェー王となり、ここに1814年まで存続するデンマーク・ノルウェー連合王国が誕生した。

他方スウェーデンでは、1380年代中頃から最大の権勢者ボー・ヨンソンの遺言状をめぐる、メクレンブルク家出身のアルブレクト王と遺言でヨンソンの広大な遺領の管理・運営を一任されたスウェーデン人で構成される遺言執行団との対立が激しくなり、両者間の軍事衝突の危機にまで発展した。そのためメクレンブルクの脅威を感じた遺言執行団はマルグレーテへの接近を試みた。これは1387年夏のことであったが、まさしくこの重大な折に、1人息子のオールフがわずか17歳で急死した。そこでデンマークは緊急避難的処置として、女性ゆえに王位に就くことができなかったマルグレーテを事実上の支配者に選出し、さらに彼女は翌年2月にはノルウェーの、3月にはスウェーデンの支配者に選ばれた。ただしノルウェーは当時世襲王制であったことから、ノルウェーとマルグレーテとの話し合いの結果、彼女が姉インゲボーの孫に当たる当時5歳のポンメルンのエーリクを養子に迎え、彼を国王に即位させて世襲王制を復活させることが決定された。エーリクはこれに基づき、1389年9月に王位に就いた。

一方スウェーデンでは、前述のように貴族がマルグレーテを支配者に選んだことから、2人の支配者が存在する結果となり、国王と貴族との対立は決定的なものとなった。アルブレクトはスウェーデンを離れ、メクレンブルクで兵を集め、1389年にスウェーデンに再上陸したが、2月24日、スウェーデン南部のファルシェーピングでの戦いに敗北し、彼と息子が捕虜となった。マルグレーテとメクレンブルク家との彼らの解放をめぐる交渉は、1395年6月のリンドホルム協定で決着し、アルブレクト父子は解放されたが、アルブレクトは事実上スウェーデンの支配権を失った。そこでマルグレーテは、次の段階としてエーリクをデンマークとスウェーデンの王位に就けるという問題に着手し、1396年1月にはデンマークの、そして7月にはスウェーデンの王に就任させた。そして翌1397年の夏にカルマルで開催された3王国の有力貴族や高位聖職者による会議で、エーリクを連合国王に選出させ、いわゆるカルマル連合を結成させたのであった。

1401年成人となったエーリク王と、イギリス王ヘンリー4世の娘フィリッパとの結婚の交渉が開始され、前述のように、1406年にルンドで結婚式が執り行われた。

マルグレーテは1412年10月28日、今日ドイツ領となっているユトランド半島南部の港都フレンスブルクでペストのためにこの世を去ったが、最後まで実権をエーリクに移譲することはなかった。

エーリク王は、単独統治を開始してまもなく、ホルシュタイン諸伯やハンザとの戦争に突入した。彼がハンザによるバルト海貿易の独占を打破しようとしたからであった。この戦争は1416年に始まり、途中数年の休戦を挟んで、1432年まで続くことになる。バルト海貿易にとってバルト海と北海とを結ぶ重要な交易路には、ユトランド半島の根幹部を経由する陸路と、デンマークとスウェーデンとの間のエーアソン海峡を通過する海路とがあった。それゆえエーリク王は、陸路ではユトランド半島南部のシュレスヴィヒ地方を領有することと、海路では1429年にエーアソン海峡通行税を新設し、徴税のための城砦を海峡の両岸に建設することで、2つの交易路における支配権を確保しようとしたのである。これはハンザの既存の商業特権を脅かす重大な敵対行為であったため、ハンザとの全面対立が生じた。カルマル連合はその成立経過からして、防衛的な性格のものであったにもかかわらず、連合国王たるエーリクがこれをデンマーク1国の利益追求のために利用したのである<sup>12</sup>。これに対してハンザは北欧への経済封鎖で対抗した。この措置は、ハンザとの関係が最も緊密なスウェーデンにとっては大きな痛手となった。加えて、戦費調達を目的とした臨時税の徴収、貨幣の改悪、徴兵などによって、さらなる打撃を被ったスウェーデンでは、あらゆる階層に不満が鬱積していった。なおこの戦争は締結された和約の上ではハンザの勝利で終わっている。

1434年、スウェーデン中央部のダーラナ地方でエーリクに対する反乱が起こった。反乱の指導者エンゲルブレクトという人物は下級貴族であるとともに、ハンザの経済封鎖で鉄と銅の輸出が停止したことにより、最も大きな被害を受けたダーラナ地方の鉱業経営者でもあった。反乱は1436年夏のカルマル会議における協定の締結によって終息し、連合の継続も確認されたが、その際エーリク王は大きな譲歩を強いられ、事実上、敗北した。

したがって、この協定に不服なエーリクは協定を遵守せず、またエーリクに子供がいなかったため、王位継承者問題が起こったが、ここでもデンマーク貴族と対立したことから、1439年、ついに廃位を宣言され、後継者に彼の甥にあたるバイエルンのクリストファーが選出された。

追放されたエーリクはゴットランド島に留まり、ここを根拠地にして10年にわたってバルト海上で海賊行為などを行い、北欧人やハンザ商人を悩ませた。しかし、1449年のスウェーデンによる攻撃の結果、彼はこの島のヴィースボリ城をデンマーク王に譲渡して祖国ボンメルンに帰り、1459年にこの世を去った。

#### 4. 指示書の内容

この指示書に関しては従来、包括的な研究がなされていなかった<sup>13</sup>。例えば、デンマークの中世史家クリスチャン・エアスレウはその著書<sup>14</sup>の中で、またノルウェー人のハルヴダン・コートも1956年の著書<sup>15</sup>で、ごく簡単に触れているのみである。したがって、指示書の内容を詳しく検討するにあたっては、リントンとエチングのマルグレーテに関する著書、そして『デンマーク史料集成 Danmarks Riges Breve』の原文<sup>16</sup>を参照した。

マルグレーテは、前章でも触れたように、デンマークで生まれて、その後長くノルウェーに滞在したことから、原文はノルウェー語訛りの古デンマーク語で書かれている<sup>17</sup>。またマルグレーテはエーリクのことを古来の慣習に従って3人称で表しているが、本稿では理解しやすいように、エチングの著書にならって2人称で訳すことにした<sup>18</sup>。

まずは、マルグレーテの統治の内幕を知る上で重要な条項を、リントンの現代語訳と解説に基づき紹介しておきたい<sup>19</sup>。

6. 我々の息子はあらゆる地域の民衆によって、また神の恩寵に基づき彼らの王として迎えられるのであり、民衆は王に対して為すべき全てを行うことを約束している。これを行う者に対しては、あなたは彼らの法や権利を尊重することを約束しなさい。そうすればあなたが赴く所全てで平和が維持されるのです。

マルグレーテはこの条で、王国に関する彼女自身の考えをはっきりと表明している。すなわち「神の恩寵に基づく av Guds nåde 国王」という称号は、1397年のカルマル連合会議で公布された「戴冠文書」<sup>20</sup>の中に初めて登場しており<sup>21</sup>、その考えとは、権力は直接神に由来するもの、すなわち国王は立法者であり、法には左右されない存在なのである。この考え方は全国法や地方（地域）法の国王条項とはまったく相容れないものである。すなわち国王条項では「神の恩寵と共にある med Guds nåde 国王」と表されているからである。

7. あなたは兵士を自分の近くに置き、「フォデルマースク fodermarsk」や射手そして兵士を村（地方）に派遣し、自分のもとにヴェプナー（従士）を置きなさい。あなたはノルウェー人と裁判集会を催すことには慎重でなければなりません。

「フォデルマースク」という役職は、ノルウェーにとっては新しいものである。

彼は王に直属しており、既存の「王国司令官 Riksmarsk」のように独立した役職ではなかった。エーリクはできるだけ迅速に問題を処理し、反対意見が出ないようにしなければならないのであった。マルグレーテはごく少数の顧問を大いに信用していたが、その第一はこの指示書にも登場する騎士のエンドリド・エアランセンであった。彼はアーケシュヒュースの城主であり、後にはベルゲンの城主となった。

またこの条項から、マルグレーテがノルウェーでエーリク王に対する反乱が起きる危険性も考えていた<sup>22</sup>、若い王ができる限りノルウェー人と関係を持つことを避けさせようとしていた<sup>23</sup>、と推測できる。

10. あなたは王の書簡や決算書そして王領地に関する登記簿と共に、アーケシュヒュースの「ファータビューレン（食糧貯蔵室）」の文書館を個人として管理しなさい。あなたは自分と別の有力者2人の印でドアを封じ、その2人がその証人となりなさい。

この指示から、ノルウェーの文書館はアーケシュヒュース城の食糧貯蔵室にあり、これが王国文書館の初期の形態であった。マルグレーテは後に、文書や書類の全てをデンマークのシェラン島西部のカルンボー城にあった自分の文書館に移したのである。レーン、土地そして税金に関するノルウェーの文書を含む書類全てと、対外関係や彼女自身の土地についての文書を、自分が利用しやすいように保管させたのであった。他方、彼女以外の者にとって、自らの正当性を文書によって証明しようとする際には、その文書の入手は困難となったのである。

13-18<sup>24</sup>. 新税の「イエーンヤード gengård」を徴収し、エーリクはアルフ・ハーラルソンや他の代官（王の役人）から決算書を要求しなさい。また税金が十分に保管されるよう注意しなさい。これらのことが迅速に行われれば行われるほど良く、そうすれば、彼らが手ぶらで帰ってくることはないでしょう。あなたは税を徴収しなければならない彼ら、すなわち、司教、騎士、女性そして若い少女に強く言いなさい。そして彼らはベルゲンで彼女（フィリップ）に接見しなさい。王女にとってふさわしいのは、この都市の城に滞在し、あなたと一緒に旅しないことでしょう。あなたは自分の任務を全うしなさい。そうすれば、あなたは王国顧問会議、あなたの母マルグレーテ、妹の少女カタリーナそして神に対して、存命中も死後も、責任を負うことができるからです。臨時税はバター、毛皮または現金で徴収しなさい。

「イェーンヤード」はノルウェーにとって新しいものであり、国王が即位後国中を巡るエーリックの道 eriksgata との関連で要求されたものであった。これはすでにスウェーデンの法の中に見られ、王に対する饗応の義務「イェーンヤード法」の一部となっていた。したがって、マルグレーテはこの法を1つの国から他の国に導入し、自分とエーリック王のために「税、イェーンヤードまたはイェルプ hjälþ」を徴収する権利を保持したのである。「イェルプ」とは臨時税のことで、王とマルグレーテが特別な場合に民衆に課することができるものであった。

20<sup>25</sup>. ノルウェー人が、オスロ聖堂参事会会長が保管していた国璽（王国印章）を所有したいと願っても、あなたがその職（書記官長職）に就任させようとしている人物が到着していなければ、あなたはまず誰をこの役職に就けるかについて王国顧問会議と話し合いたいと言い、あなたが最初に印章を差し出してはなりません。彼がやってきたならば、あなたが彼をその役職に就け、しばらくやらせてみたいと言いなさい。というのも彼は以前その職に従事していたからです。あなたは他のものを書記官長にしてはならないし、国璽を他のものに渡してはなりません。なぜなら、私（マルグレーテ）の考えでは、この役職には彼以外に適任者はいないからです。

誰かが、彼は代官にも書記官にもなりえないと言うのであれば、あなたは、あなた自身が彼に、この問題についてどう考えているかを問いなさい。私は、彼が代官と書記官長の両方（の職務）を全うできると考えているからです。

ノルウェー人は、マルグレーテが国璽をノルウェー国外に持ち出したことに不満を持っていた。彼らは「王国の鍵（国璽）」を手元に保管できるノルウェー人の王国書記官長を希望していた。そうすることで、ノルウェーは法律面で自立できるからであった。しかしマルグレーテは書記官長の権限を弱め、国璽を正当な国璽の保管者であったオスロのマリア教会の参事会会長から、王の私的な役人の手に移すことを望んでいた。マルグレーテが新たに王国書記官長に就任させようとしていた人物とは、ドイツ人騎士のクラウス・グルベンダールであった、と思われる。彼は1407年から15年までボーヒュースの城主となったが、マルグレーテの書記官長そして公文書保管人としての役割を果たしたのであった。なお、国璽はマルグレーテが亡くなって数年後に、ノルウェー人の手元に戻っている。このようにして、マルグレーテはノルウェー王国顧問会議の権限を抑制したのであった。



21. あなたは代官（クラウス・グルベンダールと思われる<sup>26</sup>）に反抗する力を誰にも与えてはならず、また彼が今もっているレーンを奪って誰かに与えてはなりません。神とあなたと我々のみが、代官を任免できるのです。彼に好意的でない者がいるので注意しなさい。なぜなら彼は外国人であり、国家の権限を代行しているからです。

この助言から、マルグレーテの代官政策を垣間見ることになる。彼女は外国人代官を任命することについて何とも思っていないのである。外国人代官は、国王ができるだけ多くの収入を得られるようとり計らうからである。

27. あなたは、決算書に対する領収書を代官たちに発行する前に、私たちに領収書の発行を任せなさい。というのも、あなたの公開状で、私たちが代官たちの収支報告を聞き、私たちが彼らに領収書を与えることになっているからです。あなたは、文書を自分が持っている印章で絶対に承認してはならず、代官たちにデンマークにある国璽を待つように言いなさい。あなたは急ぐべきであり、あなたは毎日我々を待っており、我々が来るまで何事もしてはならないと言いなさい。

28. あなたは、安全通行証やあなたの印章で利益を提供するような文書を発行してはならず、また印章を吊るした羊皮紙の文書を絶対に発行してはなりません。もし誰かがやって来て、税の免除を、印章を吊るした紙の文書で希望しても、あなたはそのような文書の下部に自分の印章を吊るしてはならず、紙の文書の裏面に印を押しなさい。

この条から、エーリクが印章を吊るした国王文書をほとんど発行しなかった理由が明らかになった。

29. あなたは、我々（マルグレーテ）が来るまで、安全通行証や封土下賜状を誰かに発行するのを、できるだけ引き延ばしなさい。

32. あなたが貸付金を大司教に与える場合には、貸付金の返済が終わるまで、完全な明細と決算書を付けて、引き続き以前と同じレーンを大司教に所有させる、と大司教に言いなさい。

33. あなたのみが知っている目的のための税金は、あなたに対して決算書を

提出しなければならない代官に徴収させなさい。

35. ベルゲン司教ヤコブが最後に私たちのもとを離れた時、私たちは彼にあらゆる昔の特許状やアイスランドへの船舶に関する公文書を返却するよう指示しました。あなたはマグヌス王やホーコン王、または我々が発行した古い国王文書を、わたしたちが来るまでに承認してはなりません。

51. 誰かがあなたに、以前の裁判に関する判決文を求めても、あなたは、判決が下されたのがどの裁判かわからないと答え、この問題の決着をできるだけ遅らせなさい。もしそれができなければ、この問題はあなたの母がやってきたらすぐに解決されると言いなさい。

52. もし誰かが鉱石を持ってやって来て、採掘場を建設したいと要請しても、あなたは彼らに建設許可を与えてはならず、またどうあってもその権利を与える文書を発行してはなりません。なぜなら、そのようなことになれば、彼らは王国から全てを吸い上げ、自分のものにしてしまうからです。

鉄鉱石や銅鉱石は女王の大きな関心事であった。1388年春の交渉では、彼女は鉱物を出るだけ多く支配することに注意を払っていた。

53. もしノルウェーの城に関して、あなたが城を受けとったことをあなたに認めさせるために、それらの城に関する文書を要請する者がいても、あなたはそのような文書を発行してはならず、私たちは城を所有しており、おそらく彼らに再度譲渡するでしょうと言いなさい。したがって、あなたは彼らにいかなる文書も発行してはなりません。なぜなら、いずれにせよ、彼らは、彼らが得たものはあなたに返還することになるからです。

次に、エーリク個人への指示の条項を、同じくリントンの現代語訳と解説を参照しながら紹介したい<sup>27</sup>。

11<sup>28</sup>. アームンド氏もしくは他のものがあなたを賓客として招待したならば、彼らと共に食事をしなさい。老若男女を問わず、誰かがあなたに何かを差し出そうとすれば、物の大小に関わらず喜んで受け取りなさい。もしあなたがそうしなければ、その人は傷つけられるし、あなたが思っていることとは別のことを考え、このことから多くのことが生じるからです。

マルグレーテは経験豊かな女性として、あらゆる状況下で、最善の結果を引き出せるよう、常にあらゆる可能性を考慮していたのである。

39. あなたは王国顧問会議と仲良くし、彼らを喜ばせ、彼らと協議しなさい。

41. あなたはこの指示書を熟読しなさい。

42. あなたは昼夜を問わず忍耐強く、公平でなければならず、まず昼間は神に仕え、自分の言葉に注意し、大声で怒鳴ったりしないようにしなさい。そうすれば、他人が傷ついたり、他人にそれを指摘されたりはしないでしよう。

43-50. あなたは頻繁に報告書をこちらに送りなさい。

そしてマルグレーテは、最後の条で、主イエス・キリスト、聖母マリア、聖ヨハネそしてあらゆる聖人の名において、王と王の行動に対して、神のみ恵みを祈り求め、父なる神と子と聖霊の御名においてアーメン、という言葉でこの指示書を締めくくっている。

以上、マルグレーテの指示書の中から、重要と思われる条項とその解説を紹介したが、この指示書によって、「全権を有する婦人にして正当な女主人」であるマルグレーテが、如何に王国を統治しようとしていたかを知る重要な手がかりを得ることができた、と思われる。指示書では、君主が独裁的権力を握り、文書館、税（臨時税）の徴収、レーン、教会そして代官などを支配・管理する方法が述べられている。また政治的駆け引きに関しても、老練さを発揮して、時間稼ぎや支配者が蒙るであろう不利益をできる限り回避しようとする、「狡猾な手段やずる賢い方法」<sup>29</sup> が指示されている。氏名不詳のホルシュタイン人が15世紀に著した年代記には、彼女について「彼女の狡猾さは並外れたものだった」<sup>30</sup> という記述があるが、まさにそれを裏付ける内容が多く含まれている。

マルグレーテの性格についてエアスレウは次のように指摘している。彼女は常に、達成すべき目標を限定することを心得ており、父王ヴァルデマー4世のような冷酷さや厳しさは持ち合わせていなかった。他方、先にも触れたように、当時の史料が彼女について語る時、まず出てくる言葉は「狡猾さ」であったが、しかしながら、彼女は人心を掌握する能力においては父王をはるかに凌駕していたともいわれている。その例として、ヴァルデマー4世に対してしばしば反抗を企てた誇り高きデンマーク貴族が、彼女に屈服したし、マルグレーテの義父マグヌス・

エーリックソンを王位から追放し、メクレンブルク家のアルブレクトを招請したスウェーデン貴族も、マルグレーテを支配者として受け入れ、アルブレクトが要求した以上に彼女に譲歩している点が挙げられる。マルグレーテはエーリックに対して、身分の上下を問わず人々に友好的で寛大であるべきことを、強く認識させており<sup>31</sup>、彼女自身もそうしたのであろう。しかしながら、決して不屈の精神を忘れることはなかったのである<sup>32</sup>。

他方、エーリックの性格に関して、同じくエアスレウによると<sup>33</sup>、彼は支配者としての義務感が強く、彼の熱意は止まるところを知らず、彼の忍耐力や正義感はいよいよ頑固さとなって現れた。激しい感情の起伏によって、彼はしばしば自制心を失った。マルグレーテが困難を巧妙に回避し、常に新たな解決策を見出したのに対し、エーリックは目標に向かって邁進した。彼の性格は養母マルグレーテとは著しい対照を成しており、それゆえ、エーリックは意に反して、マルグレーテの業績の多くを破壊したのであった。

第2章でも触れたように、単独統治を開始したエーリックはまもなく、シュレスヴィヒ地方の領有をめぐって、ホルシュタイン人やハンザとの10数年に及ぶ戦争を開始し、その後もスウェーデン人の反乱、デンマーク貴族との対立の激化を引き起こし、ついには廃位を宣告されるに至ったのである。39条や42条はマルグレーテがエーリックの性格を見抜いた上でなされた、彼女の連合国王への重要な忠告とも受け取れるであろう。上記で引用したホルシュタイン人の年代記には、「非常に狡猾なこの王妃は、同時に、数箇所火を点けることはしなかった」<sup>34</sup>と叙述されているが、エーリックの政策は、まさしく、この逆だったのである。

## 5. 終わりに

この指示書から、マルグレーテの政治的内幕を垣間見ることができたが、特に興味深いのは28条であった。というのも、この指示は、カルマル連合会議の際に作成された「連合文書」を彷彿させるからである。「連合文書」については、以前論じたので<sup>35</sup>、ここでは触れないが、この指示から判断すれば、なぜ「連合文書」が羊皮紙ではなく紙に書かれ、印が押されていたかという疑問には、「連合文書」がマルグレーテにとって満足できる内容ではなく、したがって、統治者の自由を束縛する公式文書の発布を彼女が回避しようとしたためであった、との説明が成り立つであろう。「連合文書」には、たとえば、「国王は各国の法に基づき統治すべきである。いかなる法も1国から他国に導入してはならない。(第3条)」という条項があるが、彼女は明らかにこれに違反する指示を与えているのである。

先にも触れたように、この指示書が完全に解読されていないため、解釈や条項分けの点に関して、研究者間で、さらには同じ著者の複数の研究書においても、いくつかの相違点が見られることから、一日も早い完全な解読が待たれる。

## 注

1. 拙稿。「1397年のカルマル連合会議に関する一考察」『北欧史研究』第4号，バルト＝スカンディナヴィア研究会。1985年。1－10頁。
2. Linton, Michael. *Drottning Margareta*. Aarhus, 1971. s. 286.
3. Etting, Vivian. *Margrete den Første*. København, 1986. s. 119.
4. Linton, Michael. *Margareta, Nordens Drottning 1375-1412*. Lund, 1998. s. 183.
5. Linton. 1998. s. 184.
6. Linton. 1998. s. 184.
7. Etting. s. 119.
8. Linton. 1998. s. 13.
9. 菅原邦城。「世界の女王たち，マルグレーテ1世」『歴史読本ワールド』特別増刊。新人物往来社，昭和63年，66－67頁。Linton. 1998. s. 68.
10. マルグレーテとエーリクの生涯については，前掲拙稿。『北欧史研究』第4号。拙稿。「エンゲルブレクトの反乱について」『汎バルト海・スカンジナビア国際学会誌』第5・6号，1996年。1－19頁。同じく「エーリク王の廃位について」『関学西洋史論集』第XXII号。1999年。33－45頁を参照。
11. Af sjællandske Krønike. *Valdemar Atterdag, udvalg af kilder*. Oversatte af Ellen Jørgensen. København, 1911. s. 33.
12. Lindkvist, Thomas, Ågren, Kurt. *Sveriges medeltid*. Stockholm, 1985. s. 115.
13. Linton. 1998. s. 287.
14. Erslev, Kristian. *Dronning Margrethe og Kalmarunionens Grundlæggelse*. København, 1882. ss. 238-240.
15. Koht, Halvdan. *Drottning Margareta och Kalmarunionen*. Stockholm, 1956. s. 88.
16. Linton. 1971, 1998. Etting, 1985. *Danmarks Riges Breve*. なお *Danmarks Riges Breve* については，本文でも述べたように，指示書の完全な解読が終わっておらず，したがって，正式な史料として刊行されていないため，本稿では <http://drb.dsl.dk/diplomer/05-006-2.html> からダウンロードしたものを使用した。
17. Linton. 1998. s. 184.
18. Etting. ss. 119-121.
19. この章のこれ以降の箇所では，Linton. 1998. ss. 183-193. したがって，この著書以外を参照した時にのみ，注をつけることにした。
20. 「戴冠文書」については，前掲拙稿『北欧史研究』第4号。1－2頁。
21. Etting. s. 119.
22. Linton. 1971. s. 290.
23. Etting. s. 119.
24. リントンの1971年の著書では，条項ごとに分けられてあった。それゆえ，この部分には，不明瞭な箇所がかなり多いということであろう。
25. この条については，大部分 Etting. s. 120. を，また解説は Linton, 1971. s. 293. も参照。
26. Linton. 1971. s. 294.

27. これ以下の条項も, Linton. 1998. を参照.
28. この条と解説は, Etting の著書から引用. s. 120.
29. Linton. 1998. s. 190.
30. *Holstenerpræstens Krønike (Presbyter Bremensis)*. Oversat af Anna Hude. København, 1903. s.108.
31. 11, 39, 42 条を参照.
32. *Dansk Biografisk Leksikon (D.B.L. と略記)*. Bind XV. København, 1938. ss. 312-315.
33. *D.B.L.* Bind VI. København, 1935. ss. 376-379.
34. *Holstenerpræstens Krønike (Presbyter Bremensis)*. s. 90.
35. 前掲拙稿『北欧史研究』第4号. 2-3頁.

## Margrethe's instructions to King Eric

Masanori Makino

### Summary

Margrethe's instructions were written in the beginning of 15<sup>th</sup> century when King Eric, her son-in-law, began an inspection tour to Norway. However, it is difficult to determine exact date because the original text was so ragged and damaged by moisture that a part of the date was missing. These instructions consist of 54 sets of statements which instruct King Eric on his behavior as a ruler in different situations and range over various topics from the art of politics and statesmanship to a ruler's personal conduct. The statements are not arranged systematically and also include impulsive and personal expressions so it is apparent that Margrethe had no intention for anyone else except Eric to read these informal instructions. Therefore, these historical documents are Margrethe's personal and secret counsel to King Eric and reflect her most secret political machinations. Without doubt, they give an interesting and unique insight into understanding the woman and her reign.

She advised Eric on how to achieve absolute power through the monarchy. Her instructions give us worthy information about how this experienced woman as a ruler governed her kingdom. The news chroniclers of the period such as Holsteiner and other Swedish commentators often characterized Margrethe as "cunning". Surely this word seems to be true of her because she instructed Eric to delay as long as possible the publishing of important notices which give advantage to someone. She also

advised him not to give anyone official parchment documents with his royal seal. But she was prodigious in her ability to win the hearts and minds of the people and the aristocracy in three kingdoms in Scandinavia had to concede her much moral and political authority.

She saw into the personality and the character of King Eric and gave him invaluable advice. Nevertheless, the war against Holsteiner and the Hanseatic League soon after Margrethe's death, as well as the Swedish rebellion against Eric and finally the conflicts with Danish aristocracy on the successor to throne brought about, in the end, Eric's dethronement.

By reading Margrethe's instructions, on the one hand, we gain important insights on the inner workings of her reign and, on the other hand, these instructions are one of the most important historical sources on King Eric.

## 参 考 文 献

- Christensen, Aksel E. *Kalmarunionne og nordisk politik 1319-1439*. København, 1980.
- Erslev, Kristian. *Dronning Margrethe og Kalmarunionens Grundlæggelse*. København, 1882.
- Etting, Vivian. *Margrete den Første*. København, 1986.
- Koht, Halvdan. *Drottning Margareta och Kalmarunionen*. Stockholm, 1956.
- Lindkvist, Thomas & Kurt Ågren. *Sveriges medeltid*. Stockholm, 1985.
- Linton, Michael. *Drottning Margareta*. Aarhus, 1971.
- Linton, Michael. *Margareta, Nordens Drottning 1375-1412*. Lund, 1998.
- Lönnroth, Erik. *Sverige och Kalmarunionen 1397-1457*. Göteborg, 1934.
- Holstenerpræstens Krønike (Presbyter Bremensis)*. Oversat af Anna Hude. København, 1903.
- Valdemar Atterdag, udvalg af kilder*. Oversatt af Ellen Jørgensen. København, 1911.
- 牧野正憲. 「1397年のカルマル連合会議に関する一考察」『北欧史研究』第4号, バルト＝スカンディナヴィア研究会. 1985年
- 牧野正憲. 「エンゲルブレクトの反乱について」『汎バルト海・スカンジナビア国際学会誌』第5・6号, 1996年.
- 牧野正憲. 「エーリク王の廃位について」『関学西洋史論集』第XXII号. 1999年.